

令和 8 年度 中名寄小学校経営計画

I 本校の教育目標

伝統と革新のハーモナイズで、
しなやかに伸びる子どもの育成

【令和 8 年改訂】

合い言葉

しなやかに伸びあう ～みんなで～

「しなやかに伸びあう」とは、単なる成長を意味するものではない。これは、子どもたちが日々の生活や人生の中で必ず直面する困難や試練に対して、柔軟に考え、工夫を重ね、再び立ち上がろうとする力——すなわち「レジリエンス」を育むことを指している。しなやかさは、折れない強さであり、逆境を糧にしてさらに伸びていく力である。そして、その過程で培われるのは、柔らかさを伴った「タフネス」である。困難を跳ね返すだけでなく、受け止め、しなりながら前へ進む力を強化することこそが、私たちが目指すべき教育の目標である。

「～みんなで～」という言葉には、児童・教職員・保護者・地域の方々や関係機関が一体となり、子どもたちの成長を支えてほしいという願いを込めている。子どもたちは仲間と響き合いながら伸び、教職員は教育への知恵と情熱を響かせる。保護者は家庭からの温かな支えを響かせ、地域の方々は社会的な経験と文化を響かせていく。立場は異なっても、それぞれが持つ力を持ち寄り、互いに響き合うことで、豊かな教育活動が広がっていく。

そして、その響き合いの中心にあるのが「伝統と革新のハーモナイズ」である。長い歴史の中で培われてきた本校の伝統は子どもたちに根を授け、時代の変化に応じた革新は子どもたちに新しい芽を与える。根と新芽が響き合い、伝統と革新が調和することで、子どもたちはしなやかに力強く未来へと伸びていく。

私たちの学校は、この「しなやかに伸びあう」という合い言葉を旗印に、児童・教職員・保護者・地域・関係機関が一体となって教育を進める。困難を恐れず、逆境を糧にし、互いに響き合いながら、子どもたちが自らの可能性を広げていく。その姿こそが、私たちが目指す「伝統と革新のハーモナイズで、しなやかに伸びる子どもの育成」である。

「しなやかに伸びあう」＝「レジリエンス」＝「困難に直面しても柔軟に考え、工夫して立ち直る力」。単なる成長ではなく、逆境を糧にできる「タフネス」の強化もねらいとしている。

「～みんなで～」＝「児童・教職員・保護者・地域の方々」。それぞれの立場で「伝統」と「革新」をハーモナイズさせ、しなやかに伸びる子どもの育成を実現する。

中名寄小学校(特認校)の取組

児童生徒数 (内特支児童生徒数)	1年3名(2名) 4年2名(0名)	2年4名(0名) 5年1名(0名)	3年2名(0名) 6年3名(0名)	計15名 (2名)	開校 123年目
---------------------	----------------------	----------------------	----------------------	--------------	-------------

令和8年度の重点的な取組

1 重点事項

「しなやかに伸びあう ～みんなで～」

2 設定理由

- 「しなやかに伸びあう」とは、単なる成長を意味するものではない。これは、子どもたちが日々の生活や人生の中で必ず直面する困難や試練に対して、柔軟に考え、工夫を重ね、再び立ち上がろうとする力——すなわちレジリエンスを育むことを指している。困難を跳ね返すだけでなく、受け止め、しなやかに前へ進む力を育成することが、私たちの重点事項である。

3 児童生徒の目指す姿

- しなやかに学びあう子ども（知識・技能）
しなやかに認めあう子ども（思考力・判断力・表現力等）
しなやかに琢きあう子ども（主体的に学習に取り組む態度）

4 具体的な取組

- 基礎・基本の確実な習得（知識・技能）
課題解決に向けて他の考えや情報を整理・活用し表現する力の育成（思考力・判断力・表現力等）
協働して課題解決に向かう態度の醸成（主体的に学習に取り組む態度）

5 半期の取組状況

- OODAループで日々即応的に改善を施しながら順調に取組を推進している。

特色ある教育活動

■ 探求する力の育成

- 自分で問いを立て、調べ、考え、表現する力の育成＝主に農園活動「ファーム中小」

■ 協働する力の育成

- 他者と関わり、役割を果たし、価値を生み出す力の育成＝中名寄地域合同運動会、名寄音頭、中名寄太鼓、中名寄地域合同学芸会、中名寄地域合同スキー大会、その他、地域との連携協働活動

■ 自己をつくる力の育成

- メタ認知力＝自分の学び方を知り、改善し、成長を実感する力＝農園活動「ファーム中小」の他、日常的な振り返り・発表活動

■ 社会とつながる力の育成

- 地域や社会課題と関わりながら学ぶ力＝「田植え」、「稲刈り」、通年の「風の子教室」（講師：北国博物館学芸員）、「風の子集会」（餅つき）、走力トレーニング・クロカン教室（講師：阿部雅司氏） 他

【上記の取組上の課題(市教委への要望含む)】

- 児童数と職員数が課題。特認校であるため、本校への通学を希望する児童と保護者は市内に多数存在しているが、「スクールバス」の運行がないため、断念するケースが何十年と続いている。



第4号

【発行日】
令和8年
7月23日



【教育目標】伝統と革新のハーモナイズで、しなやかに伸びる子どもの育成

【合い言葉】 「しなやかに伸びあう ～みんなで～」

「わかる」「できる」は、もう古い？

校長 稲本 雄一

本日、無事に1学期が終了しました。成長に向けて、ひたむきに努力した子どもたちに敬意を表するとともに、職員の指導力や保護者・地域の皆様のご理解ご協力に感謝申し上げます。

おかげ様で、子どもたちは、こんなことが「わかる」ようになりました、あんなことも「できる」ようになりましたと、その成果を誇示したいところですが、「わかる」「できる」をゴールとする学校教育は、実のところ少し古いと考えています。令和となり、学びが変わり始めています。「わかる」「できる」は学びの入口＝スタートであり、決してゴールではありません。

なぜ、「わかる」「できる」は、古いのか？

- ・社会の多様化にともなって「正解のある世界」から「正解のない世界」に変わったから
- ・子どもたちに必要と思われる力が「再現」から「創造」へ移ったから
- ・学びの価値が「個人の達成」から「協働による価値創造」へ変わったから
- ・ICTが「わかる」「できる」の多くを代替できるようになったから

という理由が挙げられます。つまり、教育の目標（ゴール）が新しく変わったのに、評価基準が昭和や平成のままでは少し古いということです。

では、何が新しいのか？＝何をゴールにするべきか？＝何をアップデートするべきか？

- ・探求する力＝自分で問いを立て、調べ、考え、表現する＝「ファーム中小」等
 - ・協働する力＝他者と関わり、役割を果たし、価値を生み出す＝運動会や学芸会、地域との連携活動
 - ・自己をつくる力＝メタ認知＝自分の学び方を知り、改善し、成長を実感する＝振り返り・発表活動
 - ・社会とつながる力＝地域や社会課題と関わりながら学ぶ＝「田植え」「稲刈り」「風の子教室」等
- が挙げられます。つまり、「わかる」「できる」よりも、圧倒的に「生きる力」が重要ということです。

1学期、本校では、農園活動「ファーム中小」や運動会、保護者や地域の皆様との協働的な学びを通して、子どもたちの成長を日々感じることができました。こうして振り返ると、従来の学校教育が大切にしてきた「わかる」「できる」だけでは、子どもたちの学びを十分に語りきれなくなってきたいることを強く感じます。

もちろん、知識を理解し、技能を身につけることは学びの基盤です。しかし、社会が大きく変化し、正解が一つではない課題が増える中で、子どもたちに求められる力は確実に変わってきています。

今、子どもたちに必要なのは、知識や技能を身につけるだけでなく、自分で問いを立て、仲間と価値を生み出し、学び続ける力です。

明日からは夏季休業。自分で問いを立て、「家族」と価値を生み出し、学び続ける力を養う夏休みとなることを期待します。

「はだしの学校」

どこからでも通える「特認校」

学校見学受付中

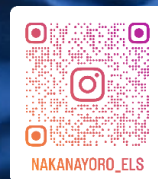
運動会：令和8年 6月 6日(土)

見学会：令和8年 7月 3日(金)

学芸会：令和8年 10月 17日(土)

見学会：令和8年 11月 16日(月)

Instagram、見てください！



名寄市立中名寄小学校